

---

こぼれる、すくう、

梨音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

こぼれる、すくう、

### 【Nコード】

N8204Q

### 【作者名】

梨音

### 【あらすじ】

あのさ、おれ、死ぬことにした。雨とオリオン座とリプトンのティーバッグで淹れた紅茶が大好きなただの会社員のひーくと、そんなひーくんが大好きなわたし（歩）。温かくて優しくどこか哀しい、気ままなふたりのそんな一年を綴ります。

## オリオン座・1 (前書き)

わりと適当にさらりと書くので変なはなしになりそうです

このホットケーキみたいなふうふわわたした人生は送れないものかな、とひーくんがぶつぶつ言いながらそれにシロップをばんばかりけるものだから、わたしは慌てて取り上げて、ついでに無理だよ、と教えてあげた。世の中そんなにみくびっちゃいかんよ君。

え、じゃあ雲なら？ まるで何も分かっていない調子で彼はもう一度訊く。いやいやそういう問題じゃないって、と手の代わりにシロップの容器を振って答えただけ、わたしのホットケーキに落ちてきたのは糸を引く二、三滴だけだった。恨めしい思いでホットケーキから垂れるほどたっぷりシロップがかかったひーくんのお皿を見つめる。気付かないふりなのかそれとも本当に気付いていないのか、彼はそうかあ、無理かあ、と間延びした調子で言い、それからその延長線みたいにもあまりにもさらりと付け加えた。あのさ、おれ、死ぬことにした。

え、待つて、今なんて。思わず顔を上げて聞き返した。さっきと同じ口調で、彼は繰り返す。おれね、死ぬことにしたの。彼の顔に射す光の筋が、ゆらゆらと揺れる。どうやら冗談ではないらしい。

え、待つてなんでどうして、何かの病気？ うっん、と彼は軽い調子で首を振った。じゃあ何なんで。いや、歩がホットケーキ人生は無理だっつうから。何それそれだけ？ ていうかわたしのせいなわけ？ 呆れて問うと、今度は不貞腐れたように頷く。惰性で生きてたつてさ、意味ないよ。諭すように説くように言った。古びた人間は新しい人間に場所を譲るべきなんだって。

ひーくんは自分が古びた人間だと思っわけ？ からかう調子でわたしは訊いた。さっきまでの恐れとか不安みたいなものはすっかり消え去って、代わりに今はばかばかしいって思いがわたしの身体を占領している。彼がまた誰かさんの偉人伝みたいなものに感化されているのはどう考えても明らかだったし、だいたい今までだって何

度もジャングルに住むだとか仕事を辞めるだとか騒ぐだけ騒いで翌日にはけろりと忘れているのだ。今回だって、今はほら、あんなに深刻に眉を寄せて頷いているけど、明日にはすっかり忘れているに違いない。わたしは真面目に彼の相手をするのを止めて、シロップを精一杯引き延ばして塗ったホットケーキを食べ始めた。

ところが。

「それが一週間経っても続いてるっていうわけね」

電話機の向こうで泉が息を吐いて言った。そうなのそうなのなんかおかしいのよねえいーちゃんどうしよう、わたしは必死に友人に訴える。そうなのだ。ひーくんがちつとも忘れてくれないのだ。一週間経ったにも関わらず、彼はまだ死ぬ気でいる。

「まあ、あたしは、大学の頃からそうなっちゃうんじゃないかなあとかちよつと思つてただけだね」

あんまりさりと口にするので、最初何を言われたのかいまいち呑み込めなかった。二秒ほど沈黙。それからえ、と無理に声を押し出すと、それが引き金になったみたいに考える間もなく口からどんな言葉が飛び出した。ばんばんばん。勢いよく乱射。

「え、どうしてえなんで知ってたの、え、何が？」

「何がって」泉は短く笑い、よつこらしよというようなことを小さく呟いた。何かしながらの電話なのかもしれない。「ひろとくんが急に死ぬって言い出しちゃうこと」

わたしはテーブルについて、自分の椅子に座って、不在のひーくんの空っぽの席を見つめながら話している。テーブルを拭いたまま置いていた、青い小花模様のプリントされている布巾を空いた手で握り締めた。一番熱くしたお湯で濡らしたはずのそれは、いつの間にかやらすつかり冷めてしまっている。指が白くなるほど力を込めて握りながら、向かいの席を見つめた。彼は今、仕事に行っている。今ごろ昼休みかも。「なんで、知ってたの」

「別に知ってたわけじゃないってば」

泉は強く否定してから、内緒ばなしをするように声を潜めて続けた。「ただ、彼、なんかそういうところあったじゃない」

布巾をますます強く握り締めた。滲み出た雫がわたしの手のひらを濡らす。

「そういつとこ、って」

「ちよつと繊細すぎるようなところ。きめ細やかで素敵なんだけど、どこか危ういの。いや、けなしてるわけじゃなくって」

最後の一言は押し黙ったわたしを気遣うように付け加えた。その声の向こうに男の子の声がする。マ、マ、マ、マ。大ちゃんの声だ。二年前に結婚した泉の、一歳の息子。もう、わたしたち、そんな年齢しなのだ。ひーくんが自分を”古びた人間”と呼んだわけが、少し分かったような気がした。親に守られる身分でもなく、かといって子供を育てるわけでもなく、ただ生きているわたしたち。

気がつくと泉に聞いていた。

### オリオン座 - 3

「大ちゃん、元気？」

「え？ ああ、うん」

突然の質問にたじろいだけど、泉の声が明らかに弾んだ。ちよつと待つて。短く言うと、電話を手から離れたのか少し雑音が入った。しばらくして、少し離れたところから、「大輔、コンニチハは」泉の声が聞こえたと思ったら、

「コンニチハ！」

「ごめん、この子ばかりみたいにでかい声出した」

泉が本当に申し訳なさそうな声で謝るので、ううん、いいのいいの、と笑った。

「ていうが大ちゃん、しゃべれるようになったんだ」

「うん、一応。まだぜんぜん片言だけどね」

照れたように誇るように笑う。わたしは初めて会ったときの泉を思い起こす。飄々とした、まるで十八歳には見えない雰囲気をもった美人。それが十年でこんな笑いかたを覚えるのだから不思議だ。少なくとも泉はこの十年間で何か得たものがあるんだな。なんだか置いてけぼりを食らったような空洞を覚える。それを察したかのように、泉が十年前と同じ口調で言った。

「そうだ、歩、遊びにおいでようちに」

「え いいの」

「うーん、まあ、分かんないけど、いいんじゃない？ あの人の、つてダンナだけど、日曜いつも空けてるし。なんかねー家族団欒のためだつって。ばかみたいって言っちゃだめかな あ、来週の日曜、どう」

「わたしは大丈夫だけど……あのさ、ひーくんも一緒に行つていい？」

もちろん。かるーくあかるーくすばやく。三拍子揃った素敵な



お返事。わたしは肩まで入っていた力をゆっくり抜いて、布巾を手から離す。その手を鼻の前に持っていつてみると、洗剤のかすかなオレンジの香りが、鼻腔をすするりとすり抜けた。あ、オレンジ、食べたいかも。

「じゃあ日曜、昼過ぎでいいかな？」

「うん、うん。一日家いるし何時来てくれても大丈夫」

「そっか、ありがと、じゃあ日曜に。それまではひーくん死なせないわ」

冗談に紛らせたつもりだったが、泉がちょっと押し黙った。眉をひそめて言葉を探す様子が、くつきりと脳裏に浮かんだ。

「いつ死んじゃうとかさ、ひろとくん、決めてないの」

彼女らしい直球の質問に思わず笑ってしまいそうになって、慌てて頬を引き締める。

「うーん、決めてるのは決めてる、けど」

「けど何」

「あんま頼りにならないというか」

「何それ、ていうかいつなの？」

オリオン座が見えた夜。わたしはゆっくりとそう発音した。そう、確かに彼はそう言った。そしてここ最近、每晚熱心に夜空を見上げている。

「オリオン座？」泉はちよつとほつとしたように繰り返した。「あ

ーよかった、今まだ九月だし、ぜんぜんまだまだじゃん。それまでにはきつとひろとくん忘れてるよ」

だといいいけどな、とわたしは答える。ほんと、そうだといいいんだけどな。

それから少し他愛ないことを喋り、大ちゃんがお腹空いたと騒いでいるようだったので電話を切った。時計を見るとまもなく二時という感じで、茹でたパスタに潰した梅としそを絡めたスパゲティを作ることにする。食べたらい物に行こう、そう、オレンジも買おう。窓を開けていても汗が滲むので、仕方なくクーラーを入れた。

そう、まだ九月で、まだ暑くて、夏よりの気候ではあるのだ。  
あるのだ、けど。

今までと変わらない調子で日々は過ぎていった。行き交う人々の服はまだ夏の色をしていて、足下を見てもサンダルが多く、季節が変わりつつあることに誰も気づいてないみたいだった。何かしら死の兆候みたいなものがあるかもしれないと思つてひーくんを注意深く観察してみたところでもなにも変わったところはないし、そうするとひとり緊張している自分がばかみたいに思えてくる。季節にもひーくんにもちつとも変化はなくて、そうにも関わらず怯えている自分。何に？ なににだろう。自分にだって分からないのだ。ほんとばっかみたい。

泉との電話から一週間とちよつとの間に雨が二回降つた。しとしとと止む気配を見せないそれと、落ち込んだ様子で夜、ベランダの淡い緑のカーテンを引くひーくん、この二つは、変化といえば変化かもしれない。つい最近までは雨は夕立のような激しいものばかりだったし、死ぬなんて言い出す前の彼は雨がとつても好きで、夜に雨が降つたりなんかすると、大喜びでそれが奏でる音楽に耳を傾けていたのだ。雨は芸術なんだよ、なんて言つて　今の彼にとつてそれは、ただ彼の死を邪魔する障害物でしかない。それはなんだかすごくかなしいことで、だからわたしはひーくんの代わりに雨を聴く。ざあ、とか、ぽたん、とか、時にはぼとん、とか、こうして聴いてみるとそれはずいぶんいろんな音を出している。窓を開けて聴いていると、ひーくんがすぐ後ろにやってきたことが分かった。ねえ、ほんと、雨って芸術だね　振り向いて言おうとした言葉は、後ろからひーくんに肩を抱かれて口のなかで消える。雨の匂いがすごいよ。彼は小さく笑い、右手を伸ばして窓を閉めてしまった。降り込んできたらいろいろ大変じゃない。ほら、もう寝よう。別に濡れて困るものなんてない。この窓際にあるのはフローリングの床と観葉植物の木、たったそれだけ。電話機やテレビや、お気に入

りのクリーム色の夏のじゅうたん、それにわたしたちふたり専用のテーブル、よつぼどの雨じゃなけりゃあそこまで届くはずがない。そう抗議したくなるけど、わたしはぐ、と口をつぐむ。なぜだかどうしようもなく涙がこぼれて、ぽたりぽたり、足元を濡らす。歩から雨が降り出したあ、おどけたように言うひーくんの声すらちゃんと耳に入らない。彼はしばらくそうやってふざけるようにわたしを泣き止ませようとしていたけど、無駄なことが分かれると、先寝ちやうねと寝室にこもってしまった。彼が離れて自由になった手を伸ばしてまた窓を開ける。さつきよりも静かに、けれど雨は降り続けている。何もできないわたしの代わりに神さまは雨を降らせてくれている。そのことに無性にほっとする。ふと気付くと涙のあとはいっかり乾いて、ただわたしの顔に貼りついている。窓を閉め、カーテンも閉めて、ひーくんのとなりに滑り込みわたしは眠ることにする。ひーくんの眠りはきつと浅いから、そのぶんしっかり、わたしが眠ってあげることにする。

朝になれば雨は止み、気温は真夏並みでひーくんは今までとんなら変わりなく、わたしはまた無駄な不安を抱えて一日を送ることになる。

## オリオン座 - 4 (後書き)

書きだめはこれでおしまいです。

次の更新まではたぶんだいぶ時間空いちやうかと…うつつ、頑張り  
ます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8204q/>

---

こぼれる、すくう、

2011年6月5日10時11分発行